

京機カフェ：京都あそ歩 第2回

「都をどり」と祇園界限

テーマ: 京都あそ歩の第二回は京都の花街を代表する京都祇園甲部歌舞練場での「都をどり」鑑賞会です。はじめにお庭や芸舞妓さんの作品展などを巡っている内に順番が来ましたら、渡り廊下を通ってお茶席に入ってお手前を拝見しながらお茶とお菓子を味わいます。そして祇園甲部直売店などのあるロビーから案内に従って観覧席につき、華やかな芸舞妓さんと三味線、笛などの鳴り物を奏でる地方(じかた)さんによる「都をどり」を鑑賞し京都の春を堪能していただきます。

その後懇親会を祇園の京料理店で開催します。7時頃に解散予定ですので、その後花見小道散策など京の宵を楽しんでいただけるでしょう。八坂神社の桜は散っているようですが、花期が遅い八重桜を愛でる夜間拝観をしている寺院もあります。また希望者は二次会で芸舞妓さんとの京都の夜を楽しんでいただきます。



明治6年、花見小路通西側にあった建仁寺塔頭清住院が歌舞練場として改造され、第2回都をどりから使用されました。

大正2年に現在の場所に移転し、昭和25年から3年間、修理のために四条南座で上演された以外、都をどりは毎年この歌舞練場で上演され続けています。



都をどりの歴史



明治維新による東京への遷都は、京都の人々にとり、このままでは衰退していくという危機感を抱かせるに十分な出来事で、明治4年、京都府が設置され京都府知事に長谷信篤、副知事に榎村正直が任命されると、彼らは京都再建に奔走しました。

彼らが掲げた政策は、京都の町の伝統を保持すると同時に新時代に即応した近代都市を建設しよう、というものであり、その方法の一つとして、博覧会開催の計画を立てました。

このとき榎村副知事は、博覧会に娯楽性を添えることを思いつき、祇園万亭(現 一力亭)の主人杉浦治郎右衛門に意見を求め、春季の博覧会の附博覧(つけはくらん:余興の意)として、祇園の芸舞妓のお茶と歌舞を公開することにしました。

そこで、杉浦治郎右衛門は、祇園新地舞踊師匠の片山春子(三世井上八千代)などと共に、伊勢古市の『亀の子踊』などを参考に、お座敷舞という形式ではなく集団での『舞』を考えました。

終始幕を閉めることなく背景を変えることで場面を変転させながら進める、という編成は、極めて近代的かつ独創的な演出であり、こうして出来た『都』を名とする『都をどり』が、明治5年、祇園新橋小堀の松の屋という貸し席で行われました。

3月13日から5月末までの80日間、舞方32名 地方11名 囃子方10名 の計53名が、7組7日交替で出演しました。これが都をどりの始まりです。翌明治6年には花見小路西側に新設された歌舞練場で第2回都をどりが開催され、以後、毎年春に行うようになりました。

また、明治博覧会に際して外国人が多く来るのを予想して、裏千家第11代家元玄々斎宗室宗匠が我が国で初めて、立礼(りゅうれい)様式の点前を創案し、これに基づいて芸舞妓は、円椅子に掛けてお点前を披露しました。当初は、祇園町南側にあった織田有楽(織田信長の実弟で茶人)の名席如庵で行っていたお茶席も、大正2年、現在の場所に歌舞練場が移転拡大したときに移ったようです。

第142回
都をどり

【只今、都をどり予約受付中です。】
10月1日より、第142回都をどりの予約受付を開始致しました。お申し込みにつきましては下記のお申し込み方法からお進みください。
皆様のご来場を心よりお待ちしております。
平成25年10月1日
祇園甲部歌舞会

開演期間
平成26年4月1日~30日

会場
京都・祇園甲部歌舞練場

主催
京都市観光協会・祇園甲部歌舞練場

開演時間
[第1回 12:30~][第2回 14:00~]
[第3回 15:30~][第4回 16:50~]
(4回公演・各公演約1時間)

春の到来を華やかに告げる古都の風物詩。

